

日本農業新聞

(11)

農 営

2020年(令和2年)6月3日(水曜日)

ゴ
チ
イ
高設栽培

初期費用を安く 培土円柱に環境制御も

肥料メーカーの椿産業は、イチゴの高設栽培システムを開発した。高設ベッドを使わず、培土を容器に高く詰めて栽培するのが特徴だ。気温や湿度、日照量なども測定し、自動でかん水や側窓の開閉ができる。安価な資材を組み合わせ、初期費用を大幅に抑えた。1坪(3・3平方㍍)からでも始められるとして、新規就農者や高設栽培の初心者なども取り組み始めやすいとみる。

肥料袋で覆った円柱形の培土に2株ずつイチゴを植える。土木現場で使った網状のプラスチック製部材で形取り、土を詰めてポットとして使う。円柱は高さ30㌢、直径25㌢。下に積んだブロックも合わせて、地面から90㌢の高さに植えるため、葉かきや収穫などを立たままでき、通常の土耕栽培より労働負担は少な

い。先進的な技術を取り入れる。温度や湿度、日射量を計測してデータを保存可能。点滴チューブを這わせており、かん水や液肥の追肥も省力的だ。ミスト発生装置もあり、暑熱対策もできる。側窓の自動開閉も温度に応じて可能だ。夏に太陽熱消

毒をすることで、土を丸ごと取り替える手間もかかりない。インパクトドライバーを使った耕耘用ハイドロを編み出した。

同社は2017年から本格的な試験栽培を開始。間口4㍍、長さ12㍍の「O・1号」のハウスで、「やよいひめ」2338株

を3列に定植。9月下旬に定植して12月から翌年に生育。5月末までの6ヶ月頃まで収穫する作型だ。今年度は3回目の栽培

力月ほどで120㌃を收

培となり、病害や害虫の発生はほとんどなく順調に生育。

同社営業開発部の小池一志部長は「通常の高設栽培より大幅に初期コストを3列に定植。9月下旬に定植して12月から翌年に生育。5月末までの6ヶ月頃まで収穫する作型だ。今年度は3回目の栽培力月ほどで120㌃を收

培となり、病害や害虫の発生はほとんどなく順調に生育。

同社営業開発部の小池一志部長は「通常の高設栽培より大幅に初期コストを3列に定植。9月下旬に定植して12月から翌年に生育。5月末までの6ヶ月頃まで収穫する作型だ。今年度は3回目の栽培力月ほどで120㌃を收



椿産業が開発したイチゴの高設栽培システム。低コストで小規模でも始められる（群馬県藤岡市で）

トが高い。夫婦一人でも楽に小規模に栽培できる」と強調する。

システムの費用は、間口4・5㍍、長さ12㍍、高さ2・5㍍のビニールハウスや、かん水装置、側窓の自動開閉装置、環境測定装置などさまざまな資材や設備を合わせて1式200万円ほどが目安。導入規模やすでに所有する設備に応じて異なる。問い合わせは同社、電0276(210)456。